始業礼拝の日に「江戸紫」の話をしました。立教大学陸上部の襷（たすき）の色は、江戸紫。江戸紫は「紫草」という植物で染めるという話をしたのを覚えていますか。

その時に、ヨーロッパで「古代紫」とか、「帝王紫」と呼ばれる、王様以外使ってはいけない紫色を作る材料となる「ある物」。それについて、一年生と四年生が調べてくれ、「ある物」とは「貝」だと、教えに来てくれました。その通り、食べられる「貝」です。私は思わず「正解！」と、言いたくなりました。日本産のアカニシやイボニシという貝から「貝紫」が得られます。

その後の事です。「ちなみに『アカニシはなかなかおいしい貝です。アカニシは何に『化ける』のか。江戸時代には何のたとえに使われたのか。』と、前々回の「つぶやき」に書いたところ、それをお母様と一緒に読んでくださった二年生のＩ君が、アカニシについて調べて、日記を見せに来てくれました。

「アカニシについて、ぼくも調べました。アカニシの貝がらは固く、しっかりふたがとじているから、しっかり物をにぎったこぶしに例えて「ケチ」な人を『アカニシ』と呼ぶそうです。アカニシは何に『化ける』のかは、分かりませんでした。サザエと味がにてるみたいだから、サザエに化けるのかな？」

よくぞ調べてくれました！江戸時代、ケチな人のことを悪口で「アカニシ」と呼んでいました。アカニシは比較的値段の安い貝なので、味が似ていて、値段の高い「サザエ」や「アワビ」の偽物として売られることがあるようなのです。それでアカニシが、「サザエ」や「アワビ」に化けるという訳です。

「貝」の話が出たついでに、今度も「貝」の話。「またかい。」などと言わず、聞いてください。私は、君たちが興味を持ってくれそうな新聞記事やネットのニュースを見ると、切り取ったり、コピーしたりしてストックしています。今日話すのはその中の一つ。

「二〇二三年二月十八日、ブレーン・パーカーさんという男性がメキシコ湾に面した米フロリダ州で、クラムチャウダーを作るために貝採りをしていた時、ひときわ大きな二枚貝を見つけた。当然食べるつもりだったが、『ひょっとしたらすごく珍しい貝かも』と思い直し、同州水族館の「ガルフ・スペシマン海洋研究所（ＧＳＭＬ）で調べてもらった。

貝はハマグリが属するマルスダレガイ目の『アイスランドガイ』で、大きさは約15.2センチ、重さは1.18キロ。

貝は年に一度、成長が一時停止するため、表面に年輪状の模様ができる。つまり『年輪』を数えれば実際の年齢が分かるのだ。数えてみるとなんと214本！一八〇九年生まれ、214歳の貝だった！

ＧＳＭＬによると、貝の最高齢記録は507歳で、ブレーンさんが見つけた貝は史上四番目になるという。

一八〇九年はエイブラハム・リンカーン大統領が生まれた年。それにちなんで、ブレーンさんはこの貝に『エイブ・クラム（貝）・リンカーン』という名前をつけた。そしてＧＳＭＬと相談してリンカーンを海に戻すことに決めたそうだ。」―日刊ゲンダイ　デジタル版　二〇二三　3/2（木）配信―

江戸紫→紫草→貝紫→貝→クラムチャウダー　→エイブラハム・リンカーンのように、知識が「連想」でつながり発展していく感じ。クラムは「二枚貝」という意味だけれど、チャウダーってなんだ？とか、リンカーンと聞くと「奴隷制度」という言葉や「どんな亡くなり方をしたのか。」「手紙を書くのが好きだったようだが、ちょっと変わった所があった。」というように、次々と連想がわき起こり、点の知識が線になり、立体となるようなイメージ。そうなるためには、本や新聞をひたすら読むのに限ります。ＡＩに命令するにしても、立体的な知識を持っている人の方が正確な命令をくだせるし、ＡＩのウソも見抜けるはずです。読書ってすてきですね。

それにしても、ブレーンさん、貝を食べた後で、214歳だったと分かるような、「後悔」をしなくてすんで、よかったですね。

（立教小学校校長　田代　正行）